



循環蘇生における輸液必要性と輸液反応性

演者 自治医科大学附属さいたま医療センター 麻酔科・集中治療部

讃井 将満 先生、増山 智之 先生、岩崎 夢大 先生、青松昭徳 先生

ショックにおける輸液蘇生の目的は、静脈還流量増大によって心拍出量増大を図り、崩れた酸素需給バランスの改善を図ることである。したがって、輸液蘇生の適応となる患者は、“循環不全の徴候があり、輸液によってその改善が期待できる”、すなわち“輸液の必要性も反応性も高いことが予測される患者”である。過剰輸液の弊害が叫ばれるようになった現代において、事前予測指標に内在する各種の問題点を乗り越える試みがなされてきたが、いつでもどこでも通用するマジック・ブレットは存在せず、依然として輸液チャレンジにより事後に必要性・反応性を確認することがゴールド・スタンダードである状況に変わらない。

さらに、何を以て輸液必要性・反応性ありと判定するか、すなわち乳酸値の改善や心拍出量増量という指標で良いかどうか、その判定の指標に関しても議論は尽きない。悲観的に言えば、本格的なショック蘇生研究が始まって50年以上経つにも関わらず、“輸液管理はブラックボックスである”という状況に大きな変化はないのである。

そこには、体内に遍く存在する水、電解質を体外から入れることに対する安全神話が存在し、結果として起こる有害作用が臨床的には見えにくいことも関与しているであろう。「先生、血圧下がりました」というナースコールに対し、何も考えずに「じゃあ、リンゲル液500cc入れておいて」と指示を出す怠慢が許される時代は終了した。

現代は、ショックにおける輸液蘇生に関して研究者はさらに真剣に向き合い、臨床家は得られた結果を十分に咀嚼して目の前の患者に適用する、すなわち急性期医療に関わる者全員が輸液蘇生を真剣に考えるべき時代なのである。